「被爆体験伝えねば」を読んで

二年　掃部　裕暉

「最後の世代だから」この言葉は僕の心を熱くした。広島、長崎に原子爆弾が投下され今年で七十年を迎える。みなさんも知っているだろう。あの出来事を。僕は、心が痛くなるのを強く感じた。

記事には、飯田さんの脳裏に焼きついているほど恐ろしい当時の様子が書かれている。

「雷に似た光」、「街は闇に包まれたようだった。」、「地獄のような光景」。僕は、とても怖くなった。普通の生活を当たり前にできているからこそ、想像しただけで体が震えてしまう。他にも、「腕や頬には、いまも生々しく傷跡が残っている」と書かれている。僕がもし飯田さんと同じ立場だったとしたら耐えることができなかったと思う。

僕の心に一つの疑問が浮かんだ。「終戦から七十年という短い間に、どうして平和な日々を送れているのだろう」。僕は、記事を読み

進めた。

飯田さんは、原爆のことを考えないようにしていたそうだ。しかし、十年ほど前に平和記念式典に参加したことや被爆者の高齢化を知ったのをきっかけに「語り伝えなければ」と思い直したという。そして、来年以降は広島に移り住み、被爆体験を伝えていくと書かれている。「最後の世代だから」。

僕の心にあった疑問を理解することができた。飯田さんのような方々が、僕たちに戦争の恐ろしさを伝えてくださっているから僕たちは平和な日々を送ることができると知った。

僕は、感謝したいと強く思った。

「戦争」。たくさんの人々の命がなくなり、大切な物を失ってしまう恐ろしいものだ。命までは、僕たちの先輩方が、その恐ろしさを伝えてくださっていた。しかし、伝えてくださっていた方は少なくなってしまっている。だから、僕たちが戦争の恐ろしさを伝えていかなければならない。そのためにも、今まで

以上に戦争について理解することが大切だと思う。もう二度と戦争を起こさないために。